

### 第2回：バグーラ族とアブド・アルアジズ山地

牧畜民が日干し煉瓦の家を建て、ムギ類の機械化近代農業の生業への組み入れを契機としてアブドアルアジズ山地（以下、AA山地）における定住化の開始とすると、バグーラ族（以下、Baqqara）の定住化はわずか50年たらずの歴史でしかない。この歴史の浅さにくわえ、いまに至るまで完全定住型の生活様式に移行したとは言えず、家畜を引きつれた季節移住も活発におこなわれてきている。したがって、Baqqaraの現況としては、あくまで定住「化」であるが、この半世紀の月日の間には生活のいくつかの局面において顕著な変化があった。列挙すると、まず道路網が発達し、車やバスの使用が増えたこと。それにつれ、重要な移動・運搬手段であったラクダの相対的地位が低下し、ラクダを手放したこと。定住村に小学校が建設され子供の教育が充実したこと。市場へのアクセスが容易になったことから乳・乳製品の都市市場への出荷が増大したこと。食生活の面では、現金により購入した野菜類を食べる機会が増えたこと、各世帯が家屋横のかまどで日常的にタンノール・パンを焼くようになったことなどがあげられる。さらに、このような外面的変化にとどまらず、もはや遊動的生活様式の「ベドゥ」としての自負ではなく、むしろ定住者、都市居住者としての「ハダル」であるとの意識が強まってきている。しかし、都市部との大きな相違点は、いまでも根強く保持している共通祖先の記憶を共有する部族への帰属意識や紐帯であろう。部族長の社会的リーダーとしての存在感はとみに薄れ、その政治的影響力は以前とくらべ相対的に弱まったとされるが、成員間の紛争解決などの際には隠然たる力を持ちつづけている。

Baqqaraは、19世紀にはユーフラテス川を拠点に、夏の河川水を利用したモロコシなど雑穀類の簡単な作付けと冬の放牧地とを往復する季節遊動を繰り返しながら、20世紀の初めまでに支流であるハブール川に沿って北上し、さらに土地利用権を広げていった。Baqqaraの分布範囲は、南はデリゾールから北はトルコ国境のラスアルアインまで、西はラッカから東はハブール川右岸にかけてである。現在のBaqqaraは約27支族に分節化しており、各支族長が並び立つが、大きくはBaqqara al zorとBaqqara al jabalの2つのグループにわかれている。Baqqara al zorは、デリゾール県のユーフラテス川沿岸からAA山地の南麓を主要な分布域としている。他方、Baqqara al jabalは、ハブール川上流部との往還によりAA山地およびそれ以北のハサケ県北部へと分布を拡大してきたグループである。活動域の拡大は、時には放牧地争いや他部族との抗争を生みつつも、次第に部族の領域を確定させていった。そして、機械化ムギ作の近代農業が普及する1950年代後半にはBaqqaraの各支族の部族民も世帯ごとに居住地を割りふられ定住化していった。その居住地周辺にたまたま山地があれば従来型の放牧中心の生業を維持し、たまたま川などがあれば、一部では積極的にコムギ、ワタの灌漑農業を導入し、家畜を手放して生業の鞍替えを図った。

牧畜を主たる生業とする部族の土地区分は、境界線が農耕地ほどはっきりしておらず曖昧である。しかし、放牧地を相互にオーバーラップさせながらも、支族単位の社会的分割による明確な土地区分が存在している。AA山地においては、Baqqara全27支族中5～6支族のBaqqara al jabalが各々の領域を住みわけている。次号では、筆者が1993～96年にかけて参与観察を実施した定住化過程のBaqqara al jabalに焦点をしぼり、AA山地における土地利用について詳細をみていく。



日帰り放牧



村の水汲み場



日干し煉瓦定住家屋の補修